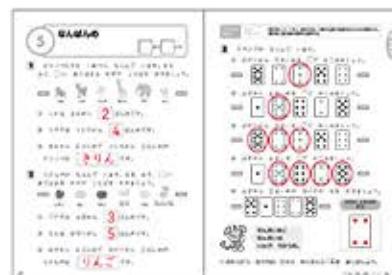


さんすう 第5回

第5回

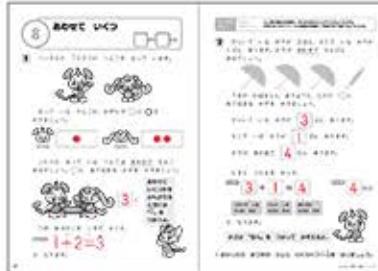
数には「人がも入る」など集合要素の個数を表す「集合数」と「6人目」など順序を表す「順序数」のふたつがあります。順序」という概念を表現するには、数の学習を始めたばかりのお子さまにとって非常に難しいことです。また、「向かって左」などの言い方があるため、上下関係に比べ左右関係の理解は難しいものです。今回の問題では、この点に特に留意する必要がありますので、あまり無理をせず日常生活の中で「上から○枚目」とおしゃべり、「その辺を左だよ」といった声かけを積極的にしていくといいでしょう。



さんすう 第6回

第6回

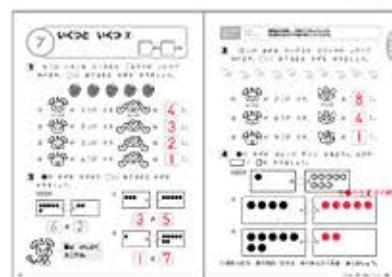
数の構成を学習していきます。これまでは、ひとつのかたまりとしてとらえられた「数」のある数である数の和という新しい視点で見ていくことで、たし算の基礎となる力をつけてしまう。また、数学の導入段階では、身近なものを使う学習が効果的です。「オレンジ味のあめが□こと△タブのあめが□」あめは全部で□だね。など日常生活の中で抽象的に合成の基準を見せてあげます。**2**の□と**3**はどうやらこの数構成の問題です。取り組みが終わったら、動物の数も野菜の数も全部で□だね」と声をかけ、ひとつずつ数をいろいろな数を合成していくというおもしろさを感じられるといいでしょう。



さんすう 第7回

第7回

数がある数にある数に分解するという取り組みを行い、ひき算の基礎となる力をつけていきます。**1**や**4**の問題では数字を見ただけで見切る力が、具体的な数をイメージするという力が必要になります。この時期にはまだそういう感じをおしゃべり感覚で感じるお子さまが多いかと思いますので、実際にあめなどを用意して2人で分けるという取り組みをしましょう。実際に作業することで、具体的なイメージと数字を頭の中でしっかりと結びつけられるようになります。なお**3**で扱った10の分解は兎にも大々さん分け方がありますので、お子さまに他の分け方を見つけてもらうのもよいでしょう。

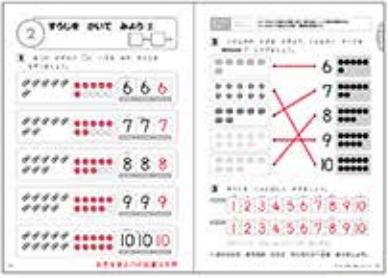


さんすう 第8回

第8回

たし算の基礎である合併「あわせいく」の基盤について学習します。ここで重視するのは、大きな数の計算ができるようになることや、速く計算する「速さ」ではなく、計算ができるようになる「正確さ」の大切さですが、今は立派の力を育てるためにも、文章の意味をとらえてそれを算数の言葉「式」で表すところなるかに注目して学習しましょう。

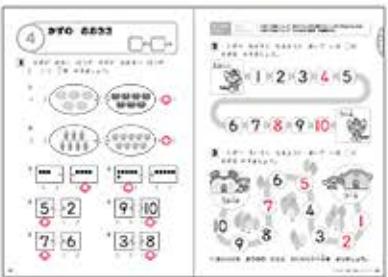
つについては、「同じ大きさだと」ということを表しているよ」と教えてあげ、算数で使われる記号についても学習できるといいでしょう。なお、繰り上がりのあるたし算は1年生の後半の学習内容となります。



さんすう 第2回

第2回

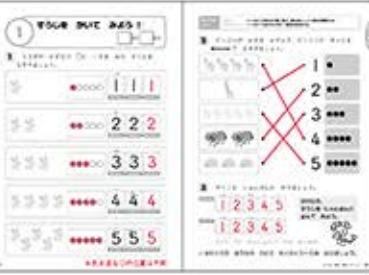
第一回に引き続き、数字の字形・筆順の学習を行います。しっかりとお手本を見て書き順どおりに丁寧に書けるといいです。お子さんが数字を複数覚えたたら、多少字形がおかしくても判別が難しくなるかもしれません。「いち」としていますが、その他に「うまなかたね」とは「なん」という読み方もあります。学習を進める中で、数には異なるいくつかの読み方があることを話してあげるとよいでしょう。



さんすう 第4回

第4回

3の数を隠れて書いていく問題は、筆し間違いです。お子さまが違う数字を記入している場合には、取り組みが終わったあとに「あっているかどうか」をゴーとから確認して、間違ったところをかき消すか、間違ったところを自分で修正するといいです。取り組みは、数の学習の土台となる大切な学習法です。身のまわりのものを数えたり、階段の段数を数えたりなど、他のものに対するさせながら数えるより効率的です。日常生活の中でも積極的に取り入れていきましょう。数を数える「数型」という取り組みは、1から順に数えるだけでなく、途中から数えたり、逆から数えたりなどという取り組みも色々なにしていくといいでしょう。



さんすう 第3回

第3回

1では、今までと違い、数えるものがバラバラの問題になっていますので、第1回や第2回の問題のお子さまは、まだ一度数えたものに印をつけるなどの工夫ができますが、数のイメージを確立するために有効な手段です。数の学習を始めたばかりの段階では、むしろ抽象的に利用してしまっていいでしょう。**2**では、3枚の箱の中にも「1」や「2」という数が隠れているおもしろさを感じてもらいたいところです。なお、この時期のお子さまは、まだ数を数える際に指を鳴らしながらあるかと思っているといいでしょう。**3**では、3枚の箱の中にも「1」や「2」という数が隠れているおもしろさを感じてもらいたいところです。なお、この時期のお子さまは、まだ数を数える際に指を鳴らしながらあるかと思っていますが、数のイメージを確立するために有効な手段です。数の学習を始めたばかりの段階では、むしろ抽象的に利用してしまっていいでしょう。「たこ」や「かに」には「はい」、「ひどい」には「こ」という数え方があります。

